

和科  
譯註

原  
人  
論

26

54

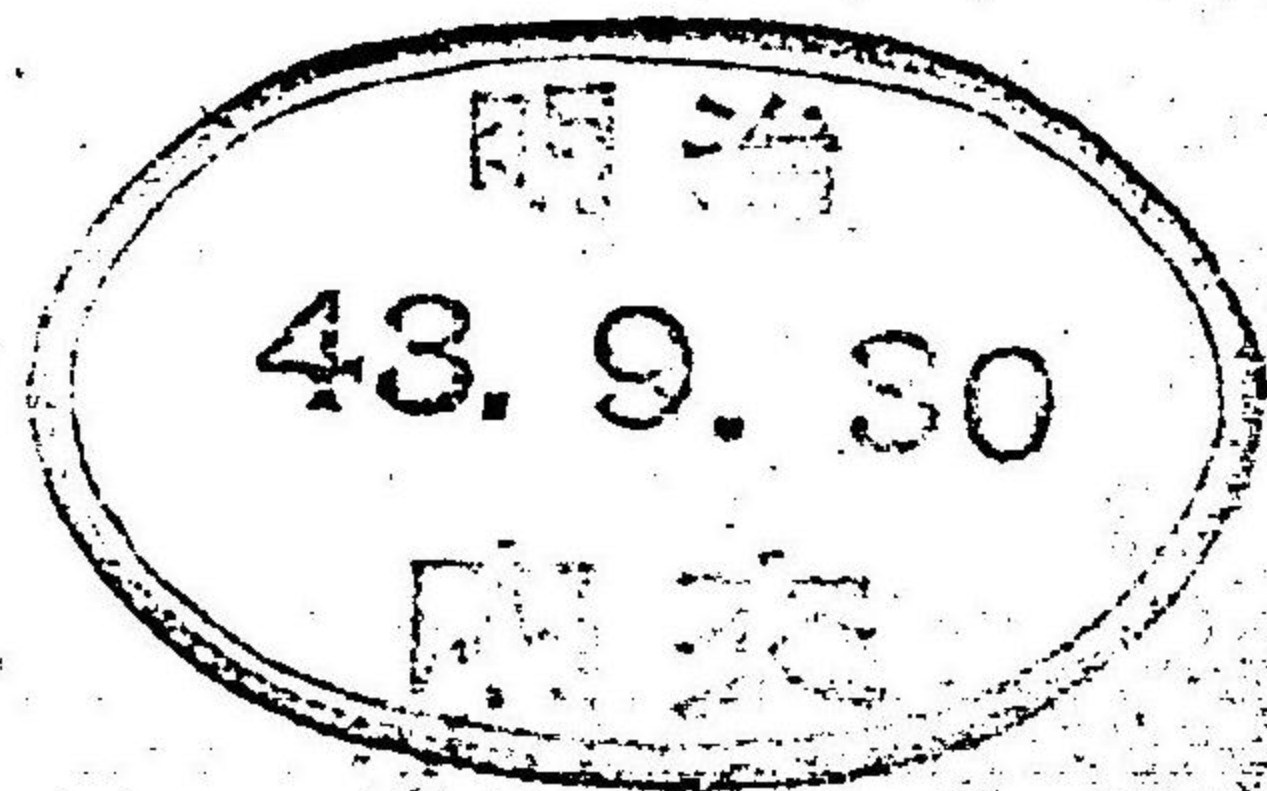
原人の理由を叙す

和科註原人論

序論目次

- 一 通じて大意を叙す、
- 二 本論著作の縁由を叙す、

一 通じて大意を叙す、  
 萬靈ばんれいの蠢蠢しゅんしゅん（動作どうさなり）たる皆其みなその本もとこ有り。萬物ばんぶつの  
 芸芸うんげん（貌かたち）たる各々たつた其そのの根こんに歸かへりす。未いまだ根こん本ほん無なく  
 して枝末しえまつあるものあらんや。況いはんや人ひとは三歳さんさいの中なか



の最靈さいれいにして天に運動の才あり、地に生成の才あり、人に鑒慮の才あり、天の萬物を生ずる惟々人最も靈なりと本源ほんげんなからん乎。且かつ人を知る者は智ち、自ら知る者は明めいなりと、今我れ人身じんしんを稟りやうけ得て、自ら從來じゆらいするところを知らず、曷げくぞ能く天能く他世たせの趣おもひくところを知らんや、曷いづくぞ能く天下古今かここんの人事じんじを知らん乎。故ゆへに數十年すうねんの中、學がくに常師じやうしなく、博ひろく内外ないぐわいの典籍てんせきに就つきて考かへ、以もつて自身じしんを原たづね、之これを原たづねて已やまず、果はたして其その本もとを得たり。

外教の原  
人を叙す

佛教の内  
權教の原  
人を叙す

内外二教  
俱に非なり  
り決す

「然しかるに、今儒道じゆうたうを習ならふ者、祇たゞに知る近ちかきは則すなはち乃祖ないそ乃父ないふ、體たいを傳つたへて相續さうぞくして此この身しんを受け得たり。遠とほくは則すなはち混沌こんこんの一氣いき、剖わかれて陰陽いんやうの二ふた爲なり、二は天地人てんちじんの三さんを生しやうじ、三は萬物ばんぶつを生しやうず萬物ばんぶつ、人ひとと皆氣みなきを本もとと爲なすこと。佛法ぶつぽうを習ならふ者、但たゞ云いく、近ちかくは則すなはち前生ぜんしやう、業ごふを造つくり、業ごふに隨したがふて報ほうを受け、此この人身じんしんを得たり遠とほくは業ごふ又は惑わくに従したがふて展轉てんてんして乃至阿賴耶あらいや識しきを身しんの根本こんぽんと爲なすこと。

内外二教の融會を叙す

皆謂く已に其の理を窮む。而れども實は未だ其の本源を見得ざる也。然るに孔子老子、釋迦は皆是れ至聖、時に隨ひ人に應じて教を設け、塗を殊にす。内外相ひ資けて、共に群生を利す。萬行を策動し、因果の始終を明す。萬法を推し究め、生起の本末を彰す。皆聖意に雖ども、而かも實あり權(方便)あり、二教は唯權にして、佛教のみ權實を兼たり。

内外二教の長短を叙す

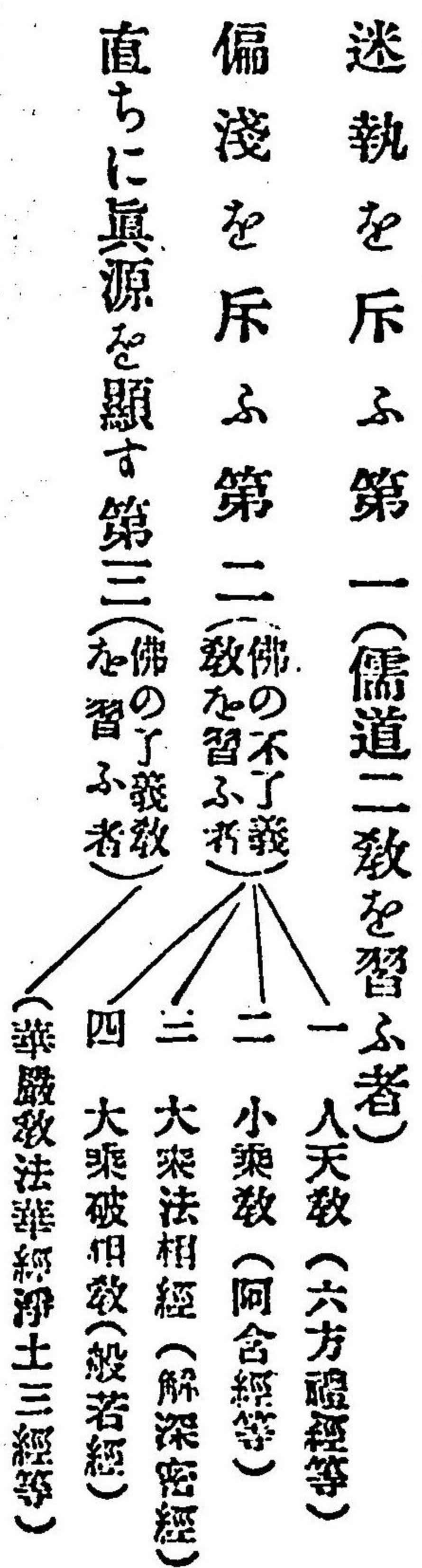
萬行を策して、惡を懲し善を勸め、同じく治に歸するは、則ち三教皆遵ひ行ふべし。萬法を推し、理を窮め、性を盡し、本源に至ては、則ち佛教のみ方に決了を爲す。

二 本論著作の緣由を叙す

然に當今の學士各々一宗を執す、佛を師とする者に就ても、仍實義に迷ふあり。故に天地人物に於て、之を原ねて源に至るあたはず。余今還て内外の教理に依て萬法を推し窮む。初

て淺より深に至る、權教を習ふ者に於ては滯  
 を破斥して、而かも其本を極む、後に了教に依  
 て、展轉生起の義を顯示して、偏を會して通ぜ  
 しむ矣。

而かも末に至り、文に四偏あり、原人と名くる  
 也。



### 本末を會通す第四

#### 本論目次

- 第一編 迷執を斥ふ。
- 第二編 偏淺を斥ふ。
- 第三編 直ちに眞源を顯す。
- 第四編 本末を會通す。

#### 第一編 迷執を斥ふ。

- 一 儒道二教の要旨を叙す
- 二 儒道二教の原人説の非を叙す

萬物は虚無の大道より生ずるといふ説を難す。  
 萬物は自然なりと云ふ説を難す。  
 萬物は元氣より生ずると云ふ説を難す。  
 萬物は天命に由ると云ふ説を難す。

爾の説の如くせば、反りて聖人の教は天命に背くことを擧げて難す。

三 儒道二教は未だ眞の原人を説かずと結論す

一 儒道二教の要旨を叙す

儒の孔子道（老子）の説、人畜等の類、皆是れ虚無の大道より生成養育す云ふ。謂く道は自然に法りて（老子の説に、人は地に法り、天は地に法り、天は道に法り、道は自然に法るを指す也。）元氣を生ず元氣は天地を生ず、天地は萬物を生ず、故に愚も智も貴も賤も、貧も富も苦も樂も皆天に稟く（是れ儒と道と同説なり、論語に死生（命あり、富貴天に在り）云ふ是れ也）故に死して後ち却て天に

儒道二教の原人の説を叙す

儒道の教を立つるの大意を叙す

歸し（儒教の所説也）其の虚無に復す。

然るに外教（儒道二教を云ふ）の宗旨は、但だ身に依て行ひを立るに在り、身の元由を究るに在らず。説く

こころの萬物は、象外を論ぜず。（談する所天地に過ぎず、所謂六合の外に

聖人存するを説きて、而も之を論ぜず）大道を指して本と爲すと雖ごも、

備さに順逆の起滅染淨の因縁を、明かさず。而

も儒老の學者、是の教、權なることを知らず、

之れを執して眞實と爲す。

二 道儒二教説の原人論の非を擧ぐ

萬物は皆  
虚無の生  
道より生  
するを云  
ふ説を難  
詰す

今畧して彼の教の不備を擧げて、之を詰斥せん  
彼の教に立る如く萬物皆虚無の大道よりして生  
ずる者ならば。大道は即ち是れ生死賢愚の本、  
吉凶禍福の基なり。基本既に常に存在せば、即  
ち禍亂凶愚、除くべからず。福慶賢善も、益す  
べからず。何ぞ老子莊子の教を用んや。其大道  
は虎狼を育し、傑紂の惡王を貽し、顔回冉耕の  
亞聖を天し、伯夷叔齊の賢士を禍す、何ぞ尊と  
名くることをゑんや。

萬物は自  
然なりと  
云ふ説を  
難す

又言く萬物皆是れ自然に生化して、因縁にあら  
ざることならば、即ち一切因縁なきところに悉  
く應に生化すべし、謂く石草を生ずべし、草或  
は人を生じ、人は畜生等を生ずべし、又生ずる  
に前なく後なく、起るに早と晩と無かるべし。  
神仙は丹藥を藉らず、太平は賢良の臣に藉ず、  
仁義は教習に藉ず。老莊周孔、何ぞ教を立て、  
軌則と爲すことを用んや。  
又言く、萬物みな元氣より生成すことならば。

萬物は皆  
元氣より  
生ずるを  
云ふの說  
を離す

萬物は皆  
天命に由  
るを云ふ  
の說を離  
す

人の生時に忽に、何事をも習慮ず、嬰孩にして  
能く愛惡驕恣するなるべし。若し忽有自然に即  
ち能く念に隨ふて愛惡驕恣するこならば、五德  
(父は養、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝、六藝(禮、樂、射、御、書、數の六也) 悉く能く念に隨ふ  
て解すべし、何ぞ學習の因縁を待て成すこ云ふ  
や。

又言く、貧富賢愚、皆天命に由るこならば、  
即ち天の命を賦る、奚ぞ貧と愚との多くして、  
富と賢との少なるや。苟も多少の分、天に在り

とせば、天何ぞ平ならざるや。況や善行なくし  
て貴く、善行を守て賤く、徳なくして富み、徳  
ありて貧く、有道にして喪び。無道にして興る  
こごあり。既に皆天に由らば、天は不道を興し  
て、有道を喪すこ云ふべし。又既に禍亂反逆み  
な天命に由らば、即ち聖人の教を設くる、人を  
責て、天を責ず、物を罪して命を罪せざるは、  
是れ不當なり。

然れば聖人の説けるこころの詩は亂世を諷刺し



聖人の説ける詩書  
禮樂の教に  
天命に背くこと  
を擧げて  
難す

道儒二教  
では未だ  
眞の原人  
を知らず  
と結論す

(國風を雅頌するは、人倫) 書は王道を讚し (典謨誓誥は二帝) 禮は  
(の廢壞、風俗澆漓を傷む) 安上を稱し (上を安じ民を治む) 樂は移風を號す (風を移し  
るは樂より善なるは莫し) (禮より善なるは莫し) 樂は移風を號す (俗を易ゆ  
るは樂より善なるは莫し) 云ふの教は是れ反りて上天の意に背  
き、造化の心に逆と云ふべし。

三 儒道二教は未だ眞の原人論を説かずと結論す。

是を以て知る、此の道儒二教のみを專にする者  
は、未だ原人を知らざる也。

第二編 偏淺を斥ふ

一 人天教

- 二 小乘教
- 三 大乘法相教
- 四 大乘破相教

一 人天教 目次

- 一 人天教の原人説を擧ぐ
- 二 人天教の原人説を難す

佛教の原人説にも、淺より深に之に略五等の別  
あり。前の四は偏淺の權教にして、後の一は顯  
性の眞教也。

一 人天教の原人説を擧ぐ

人天教の  
大意を説く

悪の因果  
を叙す

善の因果  
を叙す

正しく業  
を原人な  
りて説く

總じて造  
業を原人  
と説くこ  
とを難す

身も造業  
者に非ず  
と難す

第一人天教は。佛、初心の人の爲に、且く三世の業報、善惡の因果を説く。謂く上品の十惡を造るものは、地獄に、中品は餓鬼に、下品は畜生に墮す。故に佛、且く世の五常の教へに類して、五戒を持せしめ、三塗を免るゝここを得て、人道の中に生ず。上品の十善及び布施持戒等を修して、六欲天に生ず。四禪八定を修して、色界天、無色界天に生ず。

故に人天教と名く。

此の教の中に據るに、業を人身の本原と爲す。

二 人天教の原人説を難詰す

今之を詰斥して曰く。既に造業に由て、五道の身を受ることならば、誰れ人か業を造り、誰れ人か報を受くる。

若し此の眼耳手足、能く業を造る云はゞ、初て死するの人、眼耳手足宛然たるに、何ぞ見聞造作せざる。

心も造業  
者に非ず  
と難す

喜怒哀情  
も造業者  
に非ずと  
難す

若し心こころが業ごふを作つく言いはゞ、何者なにものか是れ心こころなる、  
若し内心ないしん言いはゞ内ない心しん（心こころ）質しつあり、身内しんないに繋かる  
如何いかんぞ速すみやかに眼耳げんに入りて外ほかの是非よしあしを辨わきまへ、是非よしあし  
を知らずんば、何なにに因よりて取捨しゆしゃせん。且かつ心こころ、眼耳げんに  
手足しゆそくと、俱ともに質しつをなさば、豈あに内外ないぐわい相あひ通つうじ  
運動うんどう應接おうせつして、同たじく業縁ごふねんを造つくることを得ねん。  
若し但ただ是れ、喜き怒ど愛あい惡わの情じやう、身口しんくに發動はつどうして業ごふ  
を造つくらしむると言いはゞ。喜き怒ど愛あい惡わの情じやう、乍たちまちに起お  
き乍たちまちに滅めつして、自おのづから其その體たいなし。

身心和合  
のものの  
造業者に  
非ずと難  
す

何なにものか將主しやうしゆとなりて業ごふを作つくるや。設もし此この如ごとく  
別々べつべつに推尋すいじんすべからず、都すべて是れ我わがが此この身心しんしん  
能よく業ごふを造つくると言いはゞ。此この身しん已すでに死しして、誰たれか  
苦樂くらくの報ほうを受けん若し死しして後更のちさらに身しんありと  
言いはゞ。豈あに今日こんにちの身心しんしん、罪つみを造つくり福ふくを修しゆして、  
他たの後世ごせの身心しんしんに、苦くを受け樂らくを受けしむるの  
理ことばりあらんや。若し此この理りありとせば、則すなはち福ふく  
を修しゆする者ものは屈くつ甚はなして、罪つみを造つくる者ものは幸さいひ甚はなか  
らん。如阿神理いかにしんり此この如ごとく無道むどうなるものならんや

三 人天教の原人説は未だ眞の原人論に非すと結論す  
 故に知る但此の教を習ふものは、業縁を信ずこ  
 雖ごも、未だ身の本原に達せざる也。

ニ 小乗教目次

(甲) 小乗教の原人説を擧ぐ

(1) 總じて人の生滅する因縁を明にす

(2) 別して染淨の因縁を明かす

(天) 染の因果を叙す

一 迷執に因つて惑業を起す

二 業に因て果を感ず

三 別して果相を説明す(是の下に四劫の略説を出す)

四 此身は色心の和合相にして實に我無きことを結す

(地)

淨の因果を叙す

一 身心を分拆す

二 惑を斷して羅漢果を證することを願す

(四諦の斷惑證理を明す)

(丙)(乙) (3) 人の原は色心及び貧瞋癡なりと結論す  
 小乗教原人説は未だ理を盡さずと難す  
 小乗教原人説は未盡理なりと結論す

(甲) 小乗教の原人説を擧ぐ

第二小乗教(乘は車にて貨物を運ぶことにて、迷界の凡夫を載せて悟界の羅漢果に運ぶ教を小乗教と云ふ也)

(1) 總じて人の生滅する因縁を明す

此の教に説く、形體の色、思慮の心。無始より

來た因縁力の故に、念念に生滅、相續して窮まりなし。水の涓涓たるが如く、燈の燄燄たるが如し。身心假に合して一に似たり、常住のものに似たり。

三 別して染淨の因縁を明かす

凡愚は覺ず、之を執して我となす。此の我を愛執するが故に即ち貪(名利を貪りて)瞋(違情の境を瞋り身を侵害するを恐る)癡(自他を計校し)等の三毒(貪瞋癡の三は法身の慧を起す。三毒を擊ち身口を發動して、一切の業を造る。)

迷ひの因果を明かす

業に因りて果を感ずることを明かす

別して果の相を明かす

業成るときは、五道、苦(地獄、餓鬼、畜生は苦也。)樂(人、天)等の身、三界勝劣等の處を受くること、逃れがたし。受くるころの身に於て、還て執して我となし、貪瞋癡等を起こし、業を造り報を受く。身は則ち先づ老ひ病み死す。死して復生す、界は則ち成就壞空、空にして復成る。

○已下は別して此界の成住壞空せるの狀を明かす初に成劫を叙す。

空劫より初て世界を成すとは。俱舍論世間品の頌に曰く。

空界より（此より前に世界ありそれが破壊せ）大風起る、傍ら廣さの數、無量、厚さ十六洛叉（洛叉を億と譯す）金剛も壞すること能はず、此を持風輪と名く、光音金藏の雲（雲色は金の如く、）布て三千界に及ぶ、雨車軸の如く下る、風遇て流を聽さず、深さ十一洛叉、始て金剛界を作す。

次第に金藏の雲、雨を注で其内に滿つ、先づ梵王界 乃至夜摩天を成す。風清水を鼓し、須彌七金等を成じ、萍濁は山地、四州及び泥犁、鹹海の外輪圍と爲す。方に器界立と名く。時に一増減を経たり（謂く人壽八萬四千歳の時より、百年に一歳を減じ、減じて十歳に至る時を減劫と名く。又十歳より増して八萬四千歳に至るを増劫と名く。前の減劫、後の増劫、合して之を一増減と云ふ也）乃至二禪盡て人間に下生す（光音天は、二禪天に住するの人の、身に光明あり、飛）初め地餅林藤を食ふ、（水減する處に地の皮を生ず、宛も蜂蜜に類す。地食して、遂に神通を失）後粳米銷せず、（後に亢稻を生ず、朝）大小便利あり、（此天は、喜樂を食す、）男女の形別れ、田を分ちて主を立て、臣佐を求め、種種差別して十九増減を経たり。

前を兼て總べて二十増減、これを名けて成劫と爲す。

○二、此教の成劫説と道教の虛無の道とを試みに對照すれば。

小乗教の空界劫を指して道教には虛無の道と云ふに似たり然れども道の體は寂照靈通にして、是れ虛無にあらず。

老子、或は之に迷ひ、權りに教へを設けて、務めて人欲を絶たしむ。故に空界を指して道と爲すにあらざるか。空界の中、大風と云ふは、即ち彼れが沌混の一氣にあたるなり。故に彼れ云く、道は一を生ずと。金藏の雲と云ふは氣形の始め、即ち大極にあたるなり。雨下て流れざると云ふは、彼の云ふところの陰氣の凝なり、陰陽相ひ合して、方に能く、萬物の生成するにあたるなり。梵王界乃至須彌と云ふは、彼か天なり。滓濁とは、彼か地なり、即ち一氣より陰陽の二を生ずるにあたる也。二禪福盡て下生すと云ふは、即ち彼か云ふところの人なり、二、三を生ずると云

は、天地人の三才備るにあたるなり。地餅已下乃至種種といふは、即ち三才の萬物を生ずるにあたるなり。

○三、住壞空の三劫を説く  
住とは、住劫亦二十増減を経ふ。

壞とは、壞劫亦二十増減なり。前の十九増減に有情を壞し（人壽三十歳の時、饑饉あり、同二十歳の時、疾疫あり、十歳の時、刀兵雖到る。）後の一増減に器界を壞る即ち火、水、風の三災によりて破壊するなり。空とは、空

劫亦二十増減の中、空にして、世界及び諸の有情なし。劫劫生生、輪廻して絶へず、終りも無く、始

時間的に無  
觀れは無  
始無終に  
亘りて生  
死窮まり  
なきこと  
明かす

（之を井戸の上の轉輪轉するに譬ふる也言ふことろは無始已來の

虚偽妄想の煩惱の因ありて、生死三有の輪轉窮りなきを云ふ。

○重ねて道教の虚無大道説は原人に非らずと結論す。

道教は只此の世界の未だ成らざる時、一度の空劫のみを知りて、之を虚無混沌の一氣等と云ひ、即ち名けて無始と爲す。然るに實は空界已前に早く、千千萬萬徧即ち無量の成住壞空を経て、成住壞空、終りて、復た始ることを知らざるなり。

此身は色心の和合相にして我あるに非ざることを結す

都て此の身は本と是れ我にあらずとを了らざるに由る。  
(衆生妄りに四大を認めて、自身の相を爲す。身は本と四大の和合、心は本と四蘊の集るころ、若し身心を離るれば何を以て我と爲さん。)是れ我にあらずとは、謂く此の身

身心を分析す

は本と色と心と和合せるに因て、相と爲す。

(地) 淨の因果を叙す

今推尋分析するに、色に地水火風の四あり。

(身の堅きを地と云ひ、濕ひを水と云ひ、煖きを火と云ひ、動くを風と云ふ、この四大和合して身あり。)心に受。(心に物の好し納る働きを云ふ。)想。(心に能く物の像を認むるを云ふ。)行。(心に遷流することを云ふ。)識。(心能物を了別するを云ふ。)の

四あり、若し色心皆是ならば、即ち八つの我と成らん。

況んや地大の中に復た衆多あらん。謂く三百六十段骨あり、一一各々別にして、皮毛筋肉肝心

身心を細かに分析す



身心を分  
析すれば  
遂に無我  
なること  
を顯す

脾腎、皆是れ相ひ與に身に非ず。  
亦た諸の心所等も、各々同からず。見（眼）は聞  
にあらず、喜は是れ怒にあらず、展轉して乃至  
八萬の塵勞あり。

既に此の衆多の物あり、知らず定んて何者を  
取りて我ご爲さん。若し皆是れ我ならば、我は  
即ち百千ありて、一身の中に、多主紛亂せん。  
若し此の身を離れて我を求むと云はゞ。此の色  
心の外に復た別の法無し。翻覆して我を推求む

惑ひを斷  
じて羅漢  
果を證る  
ことを顯  
す  
苦諦を知  
る

集諦を斷  
す

道諦を修  
す

るに皆得へからざるなり。

即ち此の身は但々是れ衆縁にして、和合の相に  
似たり、元ご我人なしと云ふことを悟る。

誰れが爲にか貪嗔せん、誰れが爲にか殺盜施戒  
せん。（此の身心は是れ衆苦の依る所なる  
を知る、之れを苦諦を知ると云ふ）

遂に心を三界有漏の善惡に滯らず。（諦は解脱、煩  
惱言ふ也。）

凡そ世間の善惡俱に出世無漏の善に用無し。事は心業と相應するが故に、聚集し  
て遂に生死を増長す。此の心に凝滯せざる時は、則ち集根を斷す。之を斷集諦と  
云ふ）

但だ無我の觀智を修して。（道は患を除くを以て功ご爲し  
空を知るの智を生ずるを以て

四果を證す

體を爲す。故に今無我の觀智を修するを主と爲す。無常、苦、空、不淨等をも攝するなり）以て貪等の煩惱を斷じ、諸の起業を止息し、（感あるに因て諸の業を起す、若）我空眞如を證得す、（煩惱の累ひを滅し盡せるを、滅諦と云ふ）乃至（中間に諸位を含む、斷證の別表にて知るべし）阿羅漢果を得て灰身滅智して（羅漢果を得たる者は、身と智とを俱に滅して、無爲の境に入り、寂滅の僅かに一分の空理を感得爲したるに過ぎず、故に羅漢も變易身を受くるなり）方に諸の苦を斷ず。

(3) 人の原は色心及び貪瞋癡なりと結論此の宗の中に據るに、色心二法及び貪瞋癡を以て根身器界の本と爲す也。過去、未來、更に

別法の本と爲るものなし。

乙 小乗教の原人説は未だ理を盡さずと難す

今之れを難詰して曰く。夫れ色心并に貪瞋癡、生を經、世を累て、身の本と爲るならば、自體須く斷へ間なかるべし。然るに五識（眼耳鼻舌身也）縁を闕ときは起ることなく、意識も時ありては行動せず。（悶絶、睡眠、滅盡の定、無想定の時）如何ぞ此の身を持ち、世世に絶さらしむることを得んや。

(丙) 小乗教の原人説は非なりと結論す

故に知りぬ、此の教に説くところも亦た未だ  
眞の原人説に非らざるなり。

三 大乘法相教目次

- (甲) 法相教の要旨を叙す
- (乙) 阿頼耶識の變相を叙す
  - (1) 阿頼耶識の變相は無始已來なるを明す
  - (2) 喩を以て阿頼耶識の變相を明す
  - (3) 喩を法に合す
- (丙) 法相教の原人は阿頼耶識なりと結論す

(甲) 大乘法相教の宗とする所を明かす

第三、大乘法相教とは。此の教に説く、一切の

有情、無始より已來法爾(自然と云ふに同じ)として八種の

識(眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿頼耶識の八つを云ふ)あり。中に於て第八

阿頼耶識は是れその根本なり。(此の識に能く諸法の種子を含藏す、それが無明の

緣によりて一切の諸法と現行して境と爲る、故に本識とも云ひ、又は宅識、藏識とも名)頓に根身器界の種子

を變じて、轉じて末那等の七識を生ず。七識は

皆能く各自分の緣とする所を變現すれば、(成唯識論

に楞伽經を引きて曰く。譬へば大海に猛風吹きて波濤を起し色を斷絶するはなきが如く、阿頼耶識の海もその如く常に住して、境界の風に動かされて、末那識等

の識浪、騰躍して轉じ生ずるが都て實の法なし。(一切諸法は原

故に見相の二分あるに似たり)阿頼耶識の外に、實の我も法も無きなり

阿頼耶識の變相は無始已來なるを明す

(乙) 阿頼耶識の變相を叙す  
然らば如何が阿頼耶識、變ずるや。  
謂く無始已來、展轉熏習して、末那識等の諸識を生ずる時、それが變じて我と法との二のものに似たり。然るに六(意識)七(末那識)二識は、無明に覆はれて、之れを了ずして、似のものに執着して之れを眞と爲し、此を緣じて實の我、實の法、在りと爲す。

唯識論に、此の變相を説きて曰く。凡夫は一

喩を以て藏識の變相を明す

喩を法に合す

切諸法悉く阿頼耶識の變現なるを知らず、之れに執着して實に我と法とありと爲す。宛かも畫伯の地獄の變相を畫き、後に之を看て恐怖するが如し。

喩へば、重患にて心身衰弱せる人の夢を患ふが如し。夢中の心に種々の境界を見て、之れを實なりと執すれども、夢の寤こき、唯夢中の所變なりと知るが如し。

我身も亦た爾り、唯阿頼耶識の變ずる所なり、

迷が故に我及び諸の境ありと執す、此に由て惑を起し業を造り、生死窮りなし。此の理を悟解せば、方に知る我が身は唯識の所變なり。

(丙) 法相教の原人は阿頼耶識なりと結論す故に法相教は阿頼耶識を身の本と爲す。

四 大乘破相教 目次

- (甲) 前教の誤謬を破して、破相教の原人説を叙す
- (1) 法相教の誤謬を破す
- (2) 喩を以て空理を明す
- (3) 經論を引きて心境皆空の理を證す
- (乙) 破相教は空を以て原人なりと説く

- (丙) 破相教の原人説を難す
- (丁) 破相教の原人説は未だ眞に非ずと結論す

(甲) 前教の誤謬を破して、破相教の原人説を叙す  
第四、大乘破相教とは

前の大乘法相教の執を破し、密に後の眞性空寂の理を顯す。

時に前法相教の、唯識所變と執する誤謬を破さん。法相教に説く如く、所變の境が既に妄ならば、能變の阿頼耶識も豈に眞なることを得んや

前の大乘法相教の誤謬を破す

夢の喩に  
就きて空  
理を明か  
す

若し一（能變の阿）は有、一（所變）は無と言はゞ、則ち夢想と夢見る物と、異なるべし。若し異なるときは則ち夢は物にあらず、物は是れ夢にあらず。寤め來るとき、夢滅して尙その物在るなるべし。又物、若し夢にあらずんば、是れ眞の物なるべし。夢若し物にあらずんば、何を以て相と爲さん。故に知る夢みる時、則ち夢相夢物、能見所見の殊に似たれども、理に據れば則ち同一虚妄都て

喩を法に  
合す

中觀論を  
引て證す

起信論を  
引て證す

所有なし。諸識も亦た爾り。皆假に宿縁に託してあり、自性は無きなり。中觀論に云く、未だ曾て一法ごして因縁より生ぜざるごあらず。是の故に一切の法、是れ空にあらざるものなし。又云く因縁によりて生ずるところの法、我は説く即ち是れ空。起信論に云く、一切の諸法、唯妄念に依て差別あり。若し心念を離れば、即ち一切境界の相な

金剛般若  
經を引て  
證す

し。  
 金剛般若經に云く、所有の相は皆な是れ虚妄、  
 一切の相を離れば、即ち佛と名く。又曰く三十  
 二相は縁によりて假に有り、幻の如く、化の如  
 し。故に若し相を取る者は、佛を見たるものに  
 あらず。又曰く、若し諸相は縁によりてあるも  
 本空なりと知るときは、即ち幻相を離れずして  
 便ち眞佛を見るなり。  
 是を以て心と境とは皆空にして、空は方に是れ

經論の明  
文に據り  
て心境皆  
空なりと  
結す

人法に約  
して空の  
義を離す

大乘の實理なることを知る。

(乙) 破相教は空を以て原人なりと説く  
 若し此の教によりて身を原れば、身は元是れ空  
 空は即ち是れ人の本なり。

(丙) 大乘破相教の原人説を難詰す

今復た此の教を詰めて曰く、若し心も境も皆空  
 ならば、その空を知るものは誰ぞや。又若し都  
 て實の法無ならば、何によりて諸の虚妄を現す  
 るや。

且つ世間の物を現見に、未だ實法によらずして。能く起るものあらず。如し濕性不變の水なくんば、何ぞ虚妄假相の波あらん。若し淨明不變の鏡なくんば、何ぞ種種虚假の影あらんや。又前に説くところの夢想夢境ごもに同じく虚妄なることは。誠に言ふところの如し。然ごも此の虚妄の夢は必ず睡眠の人に因る。今既に心境皆空ならば、未審し、何に依てか妄を現するや。

(丁) 破相教の原人説も未だ真に非すと結論す

故に知る此の教は但執情を破して、未だ明かに真靈の性を顯さず。

第三編 直ちに眞理を顯す

五 一乘顯性教目次

(甲) 總じて顯性教の要旨を叙す  
(乙) 經を引きて要旨を成す  
(丙) 華嚴の眞教によりて眞の原人を明す

- (1) 迷執の原由を叙す
- (2) 今眞の原人を悟ることを顯す
- (3) 眞の原人を悟る故に修證することを叙す
- (4) 眞心の深玄なるを結歎す



衆生本來  
真心を具  
有するこ  
ごを則す  
本覺の字  
義を解説  
し  
真心の異  
名を擧ぐ  
衆生の妄  
執を明す

(甲) 總して顯性教の要旨を叙す  
第五、一乘顯性教とは。  
説く一切の有情皆本覺の真心あり。  
無始より已來、常住清淨に、(本覺の本の)昭昭とし  
て味からず、了了として常に知る。(本覺の覺の)  
亦た佛性と名く。(真心皆是れ成佛の正因なるが故に)亦た如  
來藏と名く。  
無始際より、妄想之を翳すれば、自ら覺知せず  
但凡質を認が故に、愛著して業を結び、生死の

如來の開  
示を明す

經を引き  
て衆生に  
佛性ある  
を證す  
妄想を離  
るれば佛  
智現前す  
るさを説  
く

苦を受く。  
大覺之を惑み、其の妄執を破せんと欲して、一  
切皆空と説く。又靈覺の真心清淨にして、全く  
諸佛に同じくすることを開示す。  
(乙) 經を引きさて要旨を成す  
故に華嚴經出現品に云く。佛子は、一衆生とし  
て、如來の智慧を具有せずと云ふことなし。  
但妄想執着あるを以て、而かも證得せず。若  
し妄想を離れば、一切智(始覺の智、修習に由が)自然智

一塵に大千の經卷を含む喻に合す

一塵を破りて經卷を出す喻に合す

(本覺の性智) 無礙智 (上の二智、本さその相異なりな) 即ち現前 (常住清淨) するここを得る。

便華嚴經に曰く、一塵に大千の經卷を含む塵は衆生を喻は經卷は佛智に喩ふ。

又華嚴經に曰く。爾時如來、普く法界一切衆生を觀じて、此の言を作す。奇なるかな奇なるかな、此の諸の衆生云何ぞ、如來の智慧を具有するも、衆生迷惑して之を見ず。

我當に教るに聖道を以てして、其れをして永く妄想を離れ、自ら身中に於て、如來廣大の智慧を見ること、佛と異なるなきことを得せしむべし。

(丙) 華嚴の眞教によりて眞の原人を明す

噫、我等多劫に於て、未だ眞宗 (華嚴一乘の實教を云ふ) に遇ず反て自ら身を原ることを解せず。但虚妄の相に執著して、凡夫なりと甘認す。

唐の喪相國發菩提心の文に言く、我に眞心あり、廣大靈知、捨て、認めず。而かも此の妄念を認めて、隨て死し隨

迷執の原由を叙す

一塵を破りて經卷を出す喻に合す

て生ず。禽獸雜類と比肩して苦を受く。大丈夫たるもの豈に羞ぢざらんや。

今眞の原  
人を悟る  
ことを顯  
す

今華嚴眞教に約して、之を原て方に本來是れ佛なることを覺る。

圓覺經に此の理を説きて曰く

始めより知る衆生本來成佛して、生死涅槃も昨夢のごとし。之を大富長者の睡夢に因て、忽に貧賤醜陋の身と作るに譬ふ。勞苦至らざるところなけれども、人の呼び覺すに依て、方に元と是れ福德の身なることを知れば、從前の夢

眞の原人  
を悟る故  
に修證す  
ることを  
叙す

境は全く虚妄となるが如し。

故に須く行は佛行に依り、心は佛心に契ひ。

本に返り源に還りて凡習を斷除すべし。之を損

して又損し、以て無爲に至る。自然に應用恒沙

なる、(心既に佛心に契へば、即ち佛體に同じ、故に其用自然に發顯すれば

法界唯々心の自性なれば、)之を名けて佛と曰ふ。

當に知るべし、迷も悟も同一眞心なることを

大なるかなや妙門、原人を説きて此に至る、(凡

を包括し、眞源を究徹す。深理の妙)至れり盡せり、故に慨嘆する也。

眞心の深  
支なるを  
結歎す

○ 前の五教を説ける佛意を叙す

然しかれども佛ぶつ、前ぜんの五教ごけう（人天教、小乗教、大乘法相教、大乘破相教、一乘顯性教をいふ）を説とく。或あるは漸ぜん、或あるは頓とん。

佛は劣れる人の爲めに法便の教を設けて漸次に導く

若し中根下根の機あれば、則ち淺せん（人天教又）より深じん（大乘破相又）に至り、漸々に誘導す。先きに人天教を説きて、惡あくを離れて善に住せしめ。次に小乗教、大乘法相教を説きて、染せん（煩惱は心を染む）を離れて淨に住せしめ。大乘破相教、一乘顯性教は相を破し性を顯し、權を會して實に歸す。實教の修行に依りて、乃し成佛に至る。

若し上根勝智の機に對しては直ちに顯性の教を説き、反

一乘顯性教

大乘破相教

大乘法相教等

大小乘及び人天教に通ず

りて本より末に至る。

謂く初めに第五（顯性）に依りて、頓に一眞の心體を指示す。

心體既に顯はるれば、自ら一切皆虚妄、本來空寂なりと覺る。

但し迷を以ての故に、眞に託して起る。

須く眞心を悟るの智を以て、惡を斷じ善を修し、妄を息め眞に歸すべく。妄盡きて眞圓なる是を法身佛と名く。

第四編 本末を會通す

目次

- 一 總じて眞性の本と、生滅の末との會通を叙す
  - 二 別して本末の會通を叙す
    - (甲) 本に依りて未を起す
      - (1) 眞性の本に依りて、破相教を會す
      - (2) 眞性の本に依りて、法相教を會す
      - (3) 眞性の本に依りて、小乘教を會す
      - (4) 眞性の本に依りて、人天教を會す
      - (5) 眞性の本に依りて、儒道二教を會す
    - (乙) 内、眞性を擧げて、外、彼の說を取會す
    - (丙) 心と境との始末を辨す
  - 三 正しき解釋を生せしめよと勸む
- ~~~~~
- 一 總じて眞性の本と生滅の末との會通することを叙す

眞性の生起なるに因由することを叙す

會通を叙す

眞心の本有を明す

眞性を身の本と爲すと雖も、生起には蓋し因由あり。端なくして、忽ち身相を成ずべからず。

但前宗の未了に縁る、ゆへに節々に之を詰斥するのみ。今本末を將て會通すれば、儒道二教も亦た是なり。

二 別して本末の會通を叙す (甲) 本に依りて未を起すことを叙す

謂く唯一眞性は不生、不滅、不増、不減、不變、不易なり。

牛滅の縁  
由を叙す  
牛滅の法  
體を叙す

衆生無始より迷睡して、自ら之を覺せず。  
是れ無明が眞性を隱覆するに由る、故に迷睡  
中に在る眞性を如來藏と名く。(無明隱覆して、出纏の果  
を含攝す。故に不生不滅  
の眞性、轉して、  
如來藏と名くる也)如來藏に依るが故に、生滅の心相あり。

(1) 眞性の本に依りて破相教を會す

謂ゆる不生不滅の眞心、生滅の妄相と、和合して一に非ず異に非ず。

名けて阿頼耶識と爲す。(心の名也、如來藏と  
同體異名なり)

此の識に覺不覺の二義あり、

不生滅の眞心に由るか故に覺あり。生滅の妄識に由るか故に不覺あり。

(2) 眞性の本に依りて法相教を會す

不覺に依るが故に、最初の念動するを、業相と名く。(衆生、迷ふ故に、根本の無明、用を起す、之を獨刀、  
業相と名く。是の心の動く所を、説いて業と名く。)

又此の念は本と無なるを覺せず、故に轉じて能見の識、(緣起の動念已に成るが故に、  
轉じて、能見の識となる)及び所見の境界の相現ずることを成す。(轉識に依るが故に能く相を現す。此の  
業轉現の三細は尙阿頼耶識に屬す。)又此

の境、自心より、妄に現ずることを覺せず、執して定有と爲す。名けて法執と爲す。

(3) 眞性の本に依りて、小乗教を會す

此等を執するが故に、遂に自他の異を見て、便ち我執を成ず。(此の顛倒に依るが故に更に假名を立て、分別す。)我相を執するが故に、順情の諸境を貪受して、以て我に潤んと欲して、違情の諸境を嗔嫌して、相ひ損惱愚癡の情、展轉增長するを恐る。

(4) 眞性の本に依りて、人天教を會す

人天を會す

故に殺盜等の心神(前の意業の三毒に由て、身口を發動し、善惡の業を建立す。本是れ阿頼耶識より起る故に心神)

此の惡業に乘じ、地獄、餓鬼、畜生の中に生ず。復た此の苦を怖る、者あり。或は性善なる者は布施持戒等を行ずるの心神、此の善業に乘じ、中陰を運び、(中陰又は中有と云ふ、死して後、受生和合の因縁を見て中有に運轉し母胎に入る。)母胎の中に入る。

(5) 眞性の本に依りて、儒道二教を會す

氣を稟け質を受く、(道儒、説くところの氣を以て本と爲すの説に會す)氣は則ち頓に四大を具し、漸く諸根を成ず。心

氣を以て  
人の本な  
り云ふ  
の説に會  
す

自然は萬  
物の本な  
り云ふ  
の説を會  
す

は則ち頓に四蘊(受、想、行、識なり。)漸く諸識を成ず(眼、耳、鼻、舌)  
十月満足し生れ來て人ご名く、則ち我等が今の  
身心是なり。故に知ぬ身心各其の本あり。二類(色、四蘊)和合して一人を成ず。

然るに引業に因て、此身を受得すと雖ごも、復  
た滿業に由るが故に、貴賤貧富天壽苦樂あり。  
具に述べがらず。

或は身に惡なくして、禍をも受け、善なくして  
福を受く、不仁にして長壽し、不殺にして夭折

萬物は天  
命なりと  
云ふの説  
に會す

する者あり。皆是れ前生の、滿業已に定まるが  
故に、今世に不同の處作、自然にして然るが如  
し。  
外學の者は前世を知らず、但目前に見るところ  
に據て、唯自然なりと執す。

復た前生に於て少年の時、善を修し、老て惡を  
造り。或は少して惡なるも、老て善なる者あり  
故に今世、少年にして富貴に樂み、老年に至り  
て貧賤に苦み。或は少して貧苦に老て富貴なる



者あり。

外學の者此の理を辨ぜず、唯否泰は時運(天命と云ふに同じ)に由ること執す。(彼れ天命に由るに云の説に會す。)

(乙) 内眞性を擧げて、彼の説を收會す

氣の本を推す

然るに稟るところの氣、展轉して本を推せば、

心の本を推す

即ち混一の元氣なり。起る所の心、展轉して源を窮れば、即ち眞一の

氣を會して心に歸す

靈心也。實を究て之を言へば心の外的に別法なし。元氣

亦た心の所變に従ふて。前の轉識所見の境に屬す。

(丙) 心と境との始末を辨ず

心に就て明かす

心既に細より麤に至る、展轉妄計して、乃至業

境に就て明かす

境亦た微より著に至る、展轉變起して乃ち天地

に至る。此に據れば、即ち心識所變の境、乃ち二分と成る。

正報

依報

人は萬物の類なり

一分は即ち心識と和合して人と成り。

一分は心と合はず、即ち是れ天地山河國邑なり

三才の中唯人のみ靈なる者、心神と合するに由ればなり。

哀哉、寡學のもの異執紛々たり。

三、正解を生ずることを勸む

語を寄す道流、成佛せんご欲する者、必ず洞か

に麤細本末を明かにし、方に能く末を棄て本に

歸して。心源を反照すべし。

結果を擧げて利益を示す

麤盡き細除き、靈性顯現すれば、法として達せ

ざるなきを、法報身と名く。

自然に應現する無窮なるを化身佛と名づく。

和科註原人論終

明治四十三年九月二十日印刷  
明治四十三年九月廿五日發行

（定價金拾貳錢）

不許複製

編輯者

木津無庵

發行兼印刷者

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入  
二十人講町二十二番戶  
西村七兵衛

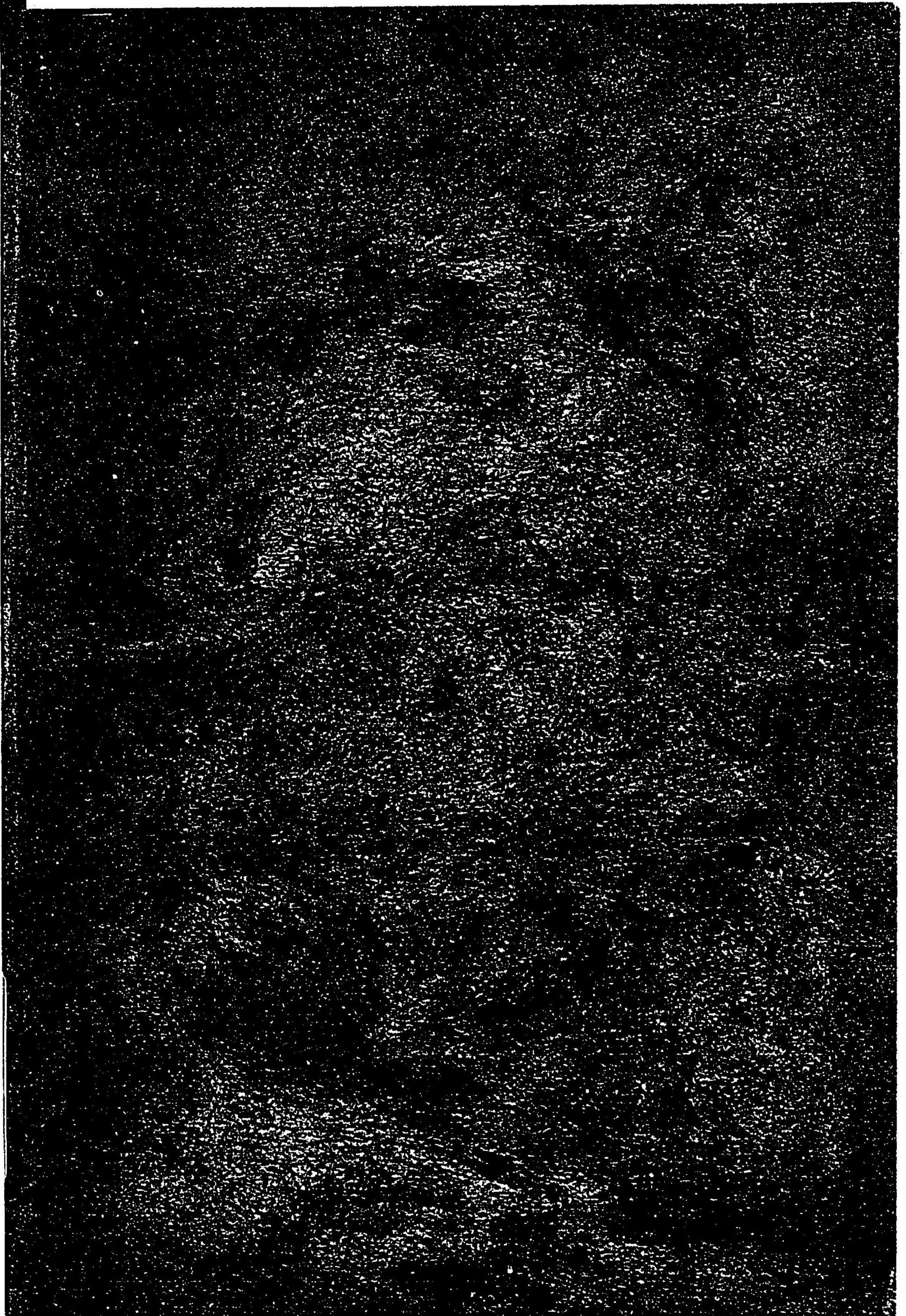
發行所

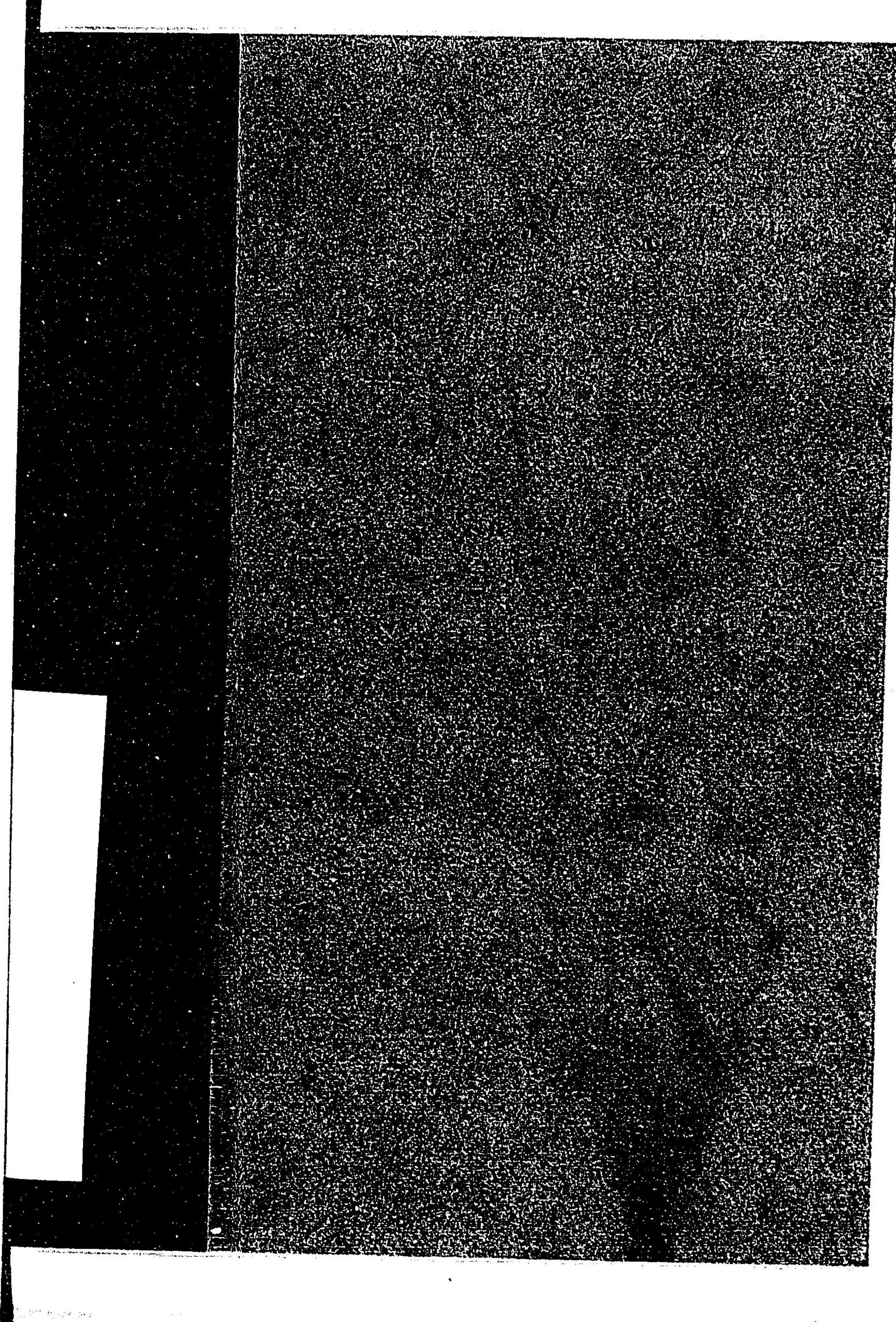
京都市東六條

法藏館

（電話貳貳五八番）  
（口座大坂壹七〇四番）







特61

102

科註  
和訳 原人論

国立国会図書館

016229-000-1

特61-102

原人論(科註和訳)

木津 無庵/編

M43.9

ABD-0078

